大空の二人、変えられない運命

ルース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大空の二人、変えられない運命

【Ｎコード】
Ｎ８８１０Ｌ

【作者名】
ルース

【あらすじ】
１０年後の世界から無事帰ってきたツナたち
毎日平和な毎日を送ってた。でも、ある日一人の少女と出会う
彼女の指にはリボーンが見覚えのあるリングがはめられていた
そしてこの出会いがこれからの戦いへとの幕開けとなった
ツナ達の運命は・・・！？
少女がはめていたリングの秘密とは・・・・！？
今、運命の歯車がうごきだす・・！

大空の出会い（前書き）

はじめまして、ルースです。

初めての作品なんで緊張してますが、読んでくれたらうれしいです

これから、よろしくお願いします！

大空の出会い

１０年後の世界から無事に帰ってきたボンゴレファミリー次期１０代目ボス、沢田綱吉、通称ツナ（またはダメツナ）
いつもと変わらない平凡（？）で幸せな毎日をおくってた
リボーン、獄寺君、山本、ランボ、お兄さん、雲雀さん、骸にクローム、京子ちゃん、ハル
楽しくて、優しくて、信頼できる友達との平和な日々
こんな毎日がずっと続くと思ってた
まさか、また戦いに巻き込まれるなんて思ってもみなかった

ここは並盛空港
獄寺君やビアンキが、飛行機を降りた空港だ
スケールは小さいがこのあたりにある唯一の空港だ

ＡＭ１１：３０
並盛空港の休憩室に一人の女の子がイスに座ってた
ピンク色のキャリーバックを隣に置き
女の子は一枚の写真を眺めていた写真にはどこからか撮られたのか
沢田綱吉、ツナの姿が写っていた

「沢田……綱吉…」

ウィィンと音をたてながら休憩室のドアが開く
くせっけの銀髪にインテリメガネをかけた長身の青年が入ってきた
青年は女の子の前で足をとめ、紳士にような慣れた手つきで手をさし伸べる

「ルナ様、準備が整いました。参りましょう」

「うん。行こう」

女の子は青年の手をとり、キャリーバックを転がしながら並盛空港を後にした
そして、女の子と青年の左手の中指には鈍い光を放つリングがはめられていた

大空の血を継ぐもの
大空の証を継ぐもの
同じ運命を背負った少年少女が出会い、運命の歯車がかみ合うとき
全てが始まり、そして
終わるだろう――
あなた達を待っている未知なる未来への可能性も何もかも――――
……

ＰＭ１５：４０

ツナはいつもと変わらない帰り道を友達と、獄寺と山本と一緒に歩っていた
ただ、ツナが激しく落ち込んでいた

理由は時間をさかのぼる事、１時間３０分前。５時間目の数字の授業でテストが返された。
今回のテストは『３０点未満』は『補習』という事になっていた
ここまで説明すれば大体の方は検討がついただろう

３０点未満は補習
ツナは今回の数字のテストの点数『２７点』
ツナは補習決定だ

普通に勉強すればいいじゃん。
という勝手な作者の考えは自分自身の心の奥にしまっておくことにする

ちなみに、山本は３０点。補習３０点『未満』なのでギリギリセーフだ。
野球に例えれば、すべりこみセーフである

ちなみに獄寺は聞くまでもなかろうが、もちろん１００満点だった
獄寺の知力を少しわけてほしいと思うツナだった

「はぁあ～、数学のテスト最悪だったな～」

深いため息をつくツナ
それを獄寺と山本はなぐさめる

「気にすんなってツナ、なんとかなるって」

気楽な声でツナを励ましながら、肩を二回ポンポンとたたく

「そうっすよ、１０代目！いざとなったらこの俺が補習をぶっ壊しますから！」

そういいながらダイナマイトを３，４本ポケットから取り出す

「ちょっと！獄寺君それはいろんな意味でだめだって！ダイナマイトもしまって！一般人が怖がってるよ、てか引いてるよ！」

一般人の通行人が獄寺のダイナマイトをみると、さりげなく三人をさけながら通っていくのだ
さっき通った主婦二人組みに『不良だわ。並中生ね』、『怖いわね～』
と言われるしまつだ
ツナは小さくため息をつく。
だけどなんだか嬉しかった。戦いのない毎日、めちゃくちゃだけと楽しい日々
もう戦いたくない。こんな毎日が続いてほしい。ツナはそう強く願った

「じゃあ１０代目、俺こっちなんで」

「じゃあツナ、また明日な！」

「うん二人とも、バイバイ」

獄寺と山本とツナは途中でわかれ、ツナは一人になった

「はぁ～、今日の数学のテストの点数リボーンにどう言おう・・・・」

２７点、赤点をとっていまった
この点数をリボーンに言えばきっと今日は徹夜で勉強だろう
それはなんとしてでも避けたい
だが・・・・

「リボーンを騙すなんて、テスト１００点とるより難しいよ・・・」

ツナはもう今日の徹夜の勉強を覚悟した。でも、その気持ちは９０％だった
残りの１０％は・・・・逃げる
ダメツナらしいダメダメな発想だ

まったく困った奴だ（うるさいよ！）

（よし、１０％にかけるぞ。どう逃げるか・・・）

すると、急にツナの勢いよく後頭部に何かがゴンッとあたった

「いてっっ、何だ？テニスボール？」

急にテニスボールが後頭部にクリーンヒットした
何だ、何だとツナが頭を抑えながらパニックている
するともう一発テニスボールがまた後頭部にヒットした

「いってーー！なんなんだよ！？」

ツナが後ろを振り返ると、家の屋根の上にテニス服を着たテニスラケットとテニスボールを持っているリボーンがいた

「逃げるあなたにスマッシュヒット☆」

「お前かよボーン！！何すんだよ！？」

リボーンは回転しながら屋根から地上へと着地する

「勉強をめんどくさくて１０％の可能性にかけようとするツナが悪いんだぞ？」

「勝手に人の心を読むなーー！！」

リボーンは読心術を心得ている
そのおかげでツナは何度も心を読まれたことがある

「全く、数字のテストで２７点をとるなんてやっぱり、ダメツナだな。」

「なっ何でそんなこと知ってんだよ！？」

さっき散歩の帰り道に山本に会ってなそん時に

『ツナが数字のテストで２７点とって補習だーってなげいてたぜ？』

「と、山本が教えてくれたんだ」

山本ーー！！なんて余計なことをーっ
ツナの心の叫びは空の彼方まで響いていった
ここでリボーンの家庭教師モードのスイッチがＯＮになる

「ツナ、今日はもちろん徹夜で勉強だぞ。覚悟しとけ！」
リボーンの目がギランと光る
「ひーーー！！」
ツナの１０％の可能性は山本によって叶わないものとなった
リボーンと徹夜で勉強（爆弾つき）＆学校での補習
最悪の組み合わせとなった

（獄寺君、もういっそ本当に補習の時に暴動でもなんでも起こしてください）

「獄寺ばっかりに頼りすぎだぞ。それに補習は俺が必ず受けさせるからな」

「だから勝手に人の心を読むなーー！！」

リボーンの読心術はとても厄介なのだ

ツナはぐちを言いながらリボーンと共に帰り道を歩っていた

「おいツナ、最近学校で変わった事はあるか？」

「へっ？特に何もないけど」

急に変なことを聞いてくるのできょとんとしてしまった

「なんだか胸騒ぎがいてな」

「えーっ、それってまた新しい敵がくるってこと？！」

リボーンが急に不吉なことを言い出すので、もう冗談だろと思った
せっかくまた平和な日常が戻ってきたのに、また戦うなんて絶対に
やだと思った

「雲雀なら絶対喜びそうなのにな」

「雲雀さんは普通に戦うのが好きだからだろ！？俺はもーやだよ、
戦うなんて！」

ツナは戦うにが嫌いだ。仲間はもちろん、敵だろうが傷つけたくな
いというのが本音だ

ツナはうなり声を出し下をむきながら髪をくしゃくしゃと乱す

「おいっツナ、よそ見してんじゃねぇ」

「へっ？」

ふと、横を見ると小走りで走っている女の子がもう目の前まで迫っていた

「うわっ！？ちょっと君ストップ！！」

「！？」

ツナが必死に止めようとするがすでに遅し。二人はそのまま激突したツナはよろけただけだったが、女の子はしりもちをついてしまった

「いたたた・・・君、大丈夫？」

ツナは座り込んでいる女の子に手をのべる

「うん、大丈夫。ありがとう」

女の子はツナの手をつかみゆっくりと立ち上がる
ツナは女の子と目が合った瞬間つい顔が赤くなった

ツナと同じ色の柔らかそうな髪、白いリボンでポニーテールにしている
きれいな白い肌、頬がうっすら桜色になっている
そして、大きくて丸いきれいな藍色の瞳
十分いや、確実に美少女の枠にはいるだろう

「ごめんなさい、ぶつかって」

ツナがいやらしい事を考えて（いないよ！）いているうちに
女の子のほうからまだ下を向いているけど謝ってきた
ツナは女の子の謝罪の言葉をきいてやっと我に返った

「そんな、俺もよそ見してたし・・ごめん」

慌ててツナも謝るとリボーンが割り込んできた

「そうだぞ、よそ見してたツナが悪いんだ。気にすんなよ。・・・・！」

リボーンの目の色が急に変わった。

目線の先は女の子が左手の中指にはめているリングだった

「あっありがとう・・・っ?!」

急に女の子も目つきが変わった
それに気づいたツナがたずねてくる

「あの～っ、何か?」

初めて顔を上げた女の子がツナの顔を見た瞬間また目つきが変わった

「!・・なんでもないです!赤ちゃんが喋ってるから・・じゃあ、
私急いでるので!」

「あっ、待って・・・」

女の子はさっきの小走りとは違く少し速いペースで走っていく
ツナはその姿をただ不可思議に見ていた

「なんだったんだろうな?・・・リボーン?」

さっきからリボーンは黙り込んで考えている様子だった

「さっき、女がつけてたリング・・どっかで見たな。」

「へっ・・・？」

ツナは女の子の指を覚えているかぎり思い出した
確かに、左手の中指にリングをはめていた

「それが、どうした？」

「まさか・・・いや、こんな所にな・・・。なんでも無い、帰るぞ。」

「えっうん。」

ツナは不思議に思ったが今はそのことは考えず、リボーンの後を追った

「ゼスト？」

さっきの女の子は走るのをやめて携帯で電話をしていた

『はい、ルナ様』

「沢田綱吉とリボーンに会ったよ」

『・・・！さようですか、予定より1日早い対面となりましたね』

女の子は歩きながら電話で話をしている
その指には空港と同じように、リングが鈍い光をはなっていた

「いい人そうだった」

『明日がたのしみですね。』

「うん、じゃあまた。屋敷で」

『はい、お気おつけて』

そう言うと通信がきれた
携帯をポケットの中にしまう
そして女の子は1人で小さく呟く

「沢田　綱吉、あなたとなら超えられそうだ。これから待ち受けている戦いを運命を・・・」

あの瞬間、２人の大空を継ぐ者が出会った
これで一歩・・これからの戦い、運命に近づいた
さあ、これから始まるだろう・・・この、運命の歯車の連鎖が・・・・
・
少しずつ・・・動き始める・・・

続く・・・・

大空の出会い（後書き）

どうでしたか？

めちゃくちゃでしたか？

それでも読んでくれて嬉しいです！

一応、学生なんでテスト等があるけれど頑張って投稿していきたいと思います

できれば、感想を書いてくれたら嬉しいです！

転入生と忍び寄る黒い影（前書き）

随分更新が遅れました。

それでも、頑張って更新したいと思うのでどうか読んで下さい！

転入生と忍び寄る黒い影

夜、ツナは家にいた。もちろんリボーンと数学の勉強中・・・ではなかった
ツナはいつもどおりランボやイーピンと遊んでいた（というか、遊ばれていた）
そのころリボーンはエスプレッソを飲みながら何か考え事をしていた

「あのリング・・・アルベルクのだが確かあのリングは・・」

「おい、リボーンさっきから何考えてんだよ？勉強も急に休みなんてさ。」

ランボとイーピンが部屋から出てやっと落ち着いた時、ツナが聞いてきた

「なんだか胸騒ぎがしてな。気おつけたほうがいい」

「なっ、また物騒なことを言うなよ！もう俺は戦いたくないんだよ！」

「まぁ、確信はねぇからな。今日はもう寝ろ、明日なんかありそうだからな。」

「なんでそんなこと分かるんだよ！？」

「勘だ」

「勘かよ！！」

そんな会話をしているうちに、リボーンはパジャマに着替え天井にぶらさがっている
ハンモックの上で寝る準備は万全になっていた

「とりあえずもう寝ろ。勉強は明日に持ち越しだ。・・スピー、スピー」

リボーンはそう言い残すとすぐに寝てしまった

「ちょっ、リボーン？なんなんだよ、一体！？寝ろなんて言っても気になって寝れないよーーー！
つーか今何時だと思ってるんだよーー！？」

沢田家にはそんなツナの叫びが響いていた
ちなみに今９：００である。まだ寝るには早いため、ていうかリボーンが早すぎたので

ツナはなんとなく並盛を散歩していた

「はぁ～、リボーンと勉強がなくなったのは嬉しいけどまた怖いこと言うなよったく」

ツナはリボーンの愚痴をつぶやいていた
そしてぶらぶら歩いていたら、今日女の子とぶつっかた道にいた
ツナはなぜかそこに立ち止まり、なんとなくあの時のことを思い出していた

「リボーンが気になってたのって、あの子がつけてたリングだよな。」

リボーンは女の子のつけていたリングを見て目つきが変わった
女の子はツナとリボーンの顔を見て目つきが変わった

「やっぱり、あの女の子が関係してんのかな」

実はツナもリボーンと同じ胸騒ぎがあった
いや、胸騒ぎというか『不安』というほうが正しいのか
また、戦いが待っているのかもしれないという不安
誰かが傷つくかもしれないという不安
戦いが来たとしても、仲間を守りぬけるかという不安
いろんな不安の感情がツナの頭を巡っていた

ツナは思わず深いため息をついてしまった

「……っっ！？」

ツナは急に体をゾクッと震わせた
後ろから大きな殺気を感じたのだ
ツナは反射的に振り返る
だが後ろには誰もいない
気味が悪くなったツナはそのまま駆け足で家へと帰っていった

そんなツナの姿を黒いフードをかぶって立って不気味な笑みをうかべて、ツナの姿を見つめていた者がいた

「フフフ……フハハハハ……」

その者の笑い声は夜空中に響きわたった
今日の月は不気味なくらい赤い

これからの運命を悪魔が祝福しているのだろうか……

朝、ツナは目の下にクマができていて、ボーとしていた

ここで作者から問題！
何故ツナはこんなに寝不足なのでしょう！？次の２つから選んでね☆

A．昨日の殺気がきになって寝れなかった

B．例の女の子の事について夜遅くまで考えていた

答えはC

リボーンと徹夜で数字の勉強をしていた

だが何故中止になった勉強をしていたかという理由は簡単であった

『リボーンの気まぐれ』

終了

「ふわぁ～、眠い…」

でかいあくびをしながら、朝食の目玉焼きを食べようとした。だが油断大敵、ツナの目玉焼きは違う箸でもってかれ、そのままリボーンの口の中に吸い込まれていった

「あー、俺のおかず！リボーン何すんだよ！？」

「言ったはずたぞツナ、マフィアの世界は食うか食われるかだとな」

「そんなこと知るかよ！返せ俺の朝ごはん！」

「お前がボーとしてるからだぞ。それよりツナ早くしろ。遅刻するぞ」

ツナはへっ？と声を出し時計をチラッと見た。すると時計の針はもう家を出ないと間に合わない時間になっていた

「うわー！遅刻する！！」

ツナは大慌てで鞄をもち家を飛び出す
ツナの肩にはリボーンがひょっこりと座っていた

「行ってきまーす！」

「行ってらっしゃ～い」

ツナのママは優しい声でツナ達を送った

ツナはある程度間に合うぐらい走って、リボーンと一緒に歩っていた

「ツナ昨日はちゃんと寝たのか？そんな様子じゃあ、居眠りしちまうぞ」

ツナは走っている最中、５回ほどあくびをしていたのだ

「誰のせいだと思ってるんだよ！？急に夜中に起こしやがって！」

「いいじゃねーか、ツナは勉強できるし、早く寝すぎて寝れなくなった俺は眠くなるし、一石二鳥だ」

「俺はあんまり特してないし！」

「おはようございます！１０代目！」

「おすツナ！朝から元気だな！」

リボーンとツナの話が続いていたら、獄寺と山本が笑顔で向かってくる

「おはよう２人共」

「ちゃおっス」

獄寺と山本と会い、４人で学校へ向かう

「なあ、今日くる転入生どんな奴だと思う？」

「へっ？転入生？？」

「あれっ忘れたんすか？１０代目？昨日センコーが転入生来るって言ってたじゃないすか」

「そっそうだっけ」

ツナは昨日数字のテストの点数の悪さのせいで先生の話が全く耳に入っていなかったのだ

ツナは最初苦笑いをしたがすぐに少し微笑んだ

（転入生か……仲良くなれるといいな）

ツナはふと、そう思った

ツナと獄寺と山本や転入生の話でもちきりだったがリボーンだけが浮かない顔をしていた

（転入生か……）

学校のホームルームの時間には教室は少しざわついていた
その理由は朝ツナ達が話していた、転入生についてだった
特に女子は男子よりも盛り上がっていた

「ほらっ静にせんか！」

ツナ達の担任の先生が出席簿を教卓の上にトンと置く先生の一言で
教室は静かになった

「えー、皆知っていると思うが、今日このクラスに転入生がくる。」

教室はまた、ざわめき始めた
リボーンは教室の近くにある木の上でその様子を見て（観察）して
いた

「じゃあ稟条（りんじょう）、入ってきなさい」

「はい」

教室のドアの方から転入生の返事が聞こえた
その声を聞いたツナは首を少しかしげた

（この声、どこかで聞いたな）

ツナがそんな事を考えていると、ガラガラと音をたてながら1人の少女が入ってきた

その少女を見た瞬間男子、いや女子達もが顔を少し赤らめた

茶色い柔らかそうな髪、白い肌、桜色の頬、藍色の丸い瞳。白いリボンでポニーテールをしている少女だった

「ああっ君は！」

ツナは少女の姿を見ると席から立ち上がり、少女に向けて指をさす

急に立ち上がったため、クラスメイトの視線が一気にツナにむけられる

「なんだ、沢田の知り合いか？」

「えっあっ、いやっ別にそういうわけじゃなくて」

ツナはそういいながら席に座る

「まぁいい。稟条は日本生まれでイタリア育ちの帰国子女だ。稟条、自己紹介を」

「はい。稟条　ルナって言います。これからよろしくお願いします」

「じゃあ稟条、沢田の隣に座ってくれ」

ルナは返事をするとツナの隣の席に座った

「よろしく、沢田綱吉」

「こっちこそ、よろしく。稟条さん」

ツナは昨日会った少女が転入してきたので驚きを隠せなかった

ツナはなんとなくルナと目があわせる事ができなくなって、少し下をむいた

「！」

ツナの視線の先には昨日もはめていたリングがあった

（なんでだろう、このリングを見ると胸騒ぎがする）

ツナはしばらくリングから目がはなせなかった

「……」

そんなツナをルナはただ見ていた

リボーンも木の上から双眼鏡を片手に持って転入生を見ていた。もう片方の手には写真を1枚持っていた

（やっぱり、あいつは……）

リボーンの写真には豪華なイスに座っている姿の、稟条　ルナが写っていた

またこの瞬間、運命の歯車が動いた
もうすぐこの歯車は完全に回るだろう
この歯車を止める事ができるものは現れるのだろうか

続く……

転入生と忍び寄る黒い影（後書き）

今回もグシャグシャでしたか？

なんだか短い感じめしたし……

なんだか本当にごめんなさい

次はもっと長めてわかりやすくします！

感想を書いてくれたら嬉しいです！

アルベルクファミリー（前書き）

えー読んでくださっている皆さま方！

本当に感謝しています！

これからもよろしくお願いします！

アルベルクファミリー

ルナが転入してきた今日の授業は終了した

数字の補習はまだ先らしく今日も普通に獄寺と山本と一緒に帰っていた

「あの１０代目、今日転入してきた稟条と知り合いなんですか？」

「へっ？」

「そうそう、俺も気になってたんだよな。もしかしてあれか？ツナの彼女だったりするのか？」

「なっななな！」

ツナはタコのように顔を真っ赤にする

「そうなんですか１０代目！？そんな大事なことなんで黙ってたんですか？一刻も早くお祝いの準備をしなくては……！」

「ちょっとストップ獄寺君！山本もデタラメなこと言わないでよ～」

ツナは顔を真っ赤にしながらも2人に抗議する

そして昨日の出来事を話した

「な～んだ、昨日たまたま会っただけだったんだ」

「そうだよ、稟条さんとは全く関係な「いや、関係なくはねぇーぞツナ」

ツナが言い終わる前に誰かがツナの言葉をさえぎった

「リッリボーン！」

ツナの言葉をさえぎったのはリボーンだった

リボーンは軽くジャンプすると山本の肩の上に乗っかった

「ルナはツナ、お前達と関係大有りだぞ」

「はっ？なにいってんだよ、稟条さんとは昨日会ったばかりだぞ、関係あるわけないじゃん」

「そりゃー昨日会ったばかりなんだから当たり前だろ。直接的ならな」

「??」

リボーンのよく分からない言葉に3人は?を頭の上に浮かべる

「獄寺、稟条ルナって言ったら何か思いつかないか?」

「俺すかっ?」

急に指摘された獄寺は少し慌てたがすぐに考え込む

「1つだけ……」

数十秒考えた獄寺か口をひらく

「1つだけ心当たりがあります」

「よし、言ってみろ」

「俺の記憶が正しければ稟条ルナは、わずか11歳という最年少で

アルベルクファミリー１０代目ボスの座についた。俺が知ってるはこれぐらいです。しかし、これが同一人物だということの確信はありません。たまたま同じ名前なのかもしれませんし……」

「でっでもそれが同一人物なら、稟条さんはマフィアのボスだって事ー！？」

ツナはもうパニック状態だった
もし本当にルナがマフィアのボスなら自分のクラスにマフィアのボスが転入してきたことになる

「でもよー、そいつはボスっつう証拠みたいなもんは無いんだろ？」

「これを見てみろ」

リボーンは山本に１枚の写真を渡した
山本が持っている写真にツナと獄寺は顔をのぞかせる

その写真には黒いスーツを着て装飾が付いているマントをはおった少女が豪華なイスに座っていた

「今写っているのは獄寺が言った、アルベルクファミリー１０代目ボスになった時の写真だ」

「これ稟条じゃねーか」

写っている少女はまだ幼いルナだった

「そうだぞ。今日転入してきた稟条ルナはマフィアのボスだ」

「マジでーー！！！？」

ツナは頭を抱えながら叫ぶ
マフィアの正式なボスが自分のクラスに転入してきた
しかも隣の席！

ツナは頭が真っ白になっていった

「でもよ小僧、稟条がスゲー奴だって事はわかったけどよ、それが俺達と何の関係があるんだ？」

「それはだな、ア「アルベルクファミリーはⅠ世（プリーモ）の時から続いている、一番絆の強い同盟ファミリーなんだよ」

「！！？」

リボーンの声がさえぎられ、そのかわりに少女の声が聞こえた
驚きながらも反射的に振り返るといつの間にいたのか目の前に立っていた

「うわっり、稟条さん！」

「ルナでいいよ。沢田君」

「えっじゃあ俺もツナでいいからルナ…っていつからいたの！？」

「えっとー『ルナが転入してきた今日の授業は終了した』ってとこから！」

「最初っからいたのー！？」

ツナがかかささずルナにツッコミをいれる

「ってこんなことやっている場合じゃなかった！えっとルナ、本当にマフィアのボスなの？」

「そ「そのとおりです。綱吉様」

また後ろから違う声がさえぎった

つーかセリフさえぎるシーン多いな（作者の独り言）

今度はくせっ毛の銀髪にインテリメガネをかけ執事服を着ている長身の青年がいた

「皆さま方がおっしゃっているとおり、ルナ様はアルベルクファミリーの正式な１０代目ボスなのです」

またいつ現れたか分からない青年がペラペラと話していく

「あれっゼスト」

「ルナ様お迎えに上がりました。あちらの曲がり角に車を止めてあります」

「テメーどっからわいでやがった！」

ルナと青年が勝手に話を進むなか獄寺が青年に殺気をむけた

「おい獄寺、知らない人に殺気むけんじゃねーよ。失礼じゃんか」

「山本様、フォローありがとうございます。」

青年は山本にニコッと笑みを浮かべる

「あれっなんで俺の名前知ってんだ？」

「アルベルクファミリーはボンゴレファミリーの同盟ファミリーです。沢田綱吉様とその守護者達の情報はある程度入っております」

「ゼスト自己紹介しないで喋っちゃダメだよ？」

「あっそれもそうですね。申しわけありません」

青年はツナ達に頭をさげ自己紹介を始める

「私アルベルクファミリー『雨の守護騎士』ゼスト・アラウンともうしあげます」

ゼストが紳士的な態度で自己紹介をした
そしてゼストの自己紹介中に気になった言葉があった

『雨の守護騎士』

「あの～、守護騎士ってなんですか？」
ツナはおそるおそるゼストに聞いたがかわりにルナがツナの質問に

答えた

「守護騎士ってのはツナ達の守護者と同じようなものだよ。後は……」

「ルナ様今日はもう遅いです。立ち話も疲れますし、明日屋敷でミニパーティーをひらいたらどうでしょう？」

「えっ？ミニパーティー？」

「いい考えじゃない、ほかの皆も紹介したいし……ツナどう？明日ヒマ？」

「えっ俺はいいけど……」

ツナはリボーンと獄寺と山本をチラッと見る

「俺はいいすっよ！１０代目！」

「俺もいいぜ！」

「丁度いいじゃねーか。アルベルクファミリーとはすごい長いつきあいだ。親睦を深めるのにいいかもしんねー。それにいろいろ聞きたいことがあるしな。たとえばリングのこととか……」

リボーンがリングの事を言うとルナとゼストの顔が一瞬険しくなった

「……じゃあ明日1時に屋敷に、ゼストがツナの家に迎えに行くから。できれば守護者全員連れてきてね。じゃバイバイ皆！」

ゼストは軽くお辞儀してルナとゼストは車で帰っていった

「じゃあ、2人共明日俺の家ね。お兄さんと雲雀さんとクロームには俺から連絡しとくよ」

「はいっ10代目！」

「また明日な！ツナ、小僧！」

2人はツナと別れ帰っていった

ツナもリボーンと一緒に自分の家へと帰っていった

明日のミニパーティーでいろんな事がわかる

アルベルクのことも

リボーンがずっときにしているリングのことについても……

続く……

アルベルクファミリー（後書き）

どうでしたか？

感想をよかったらください！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8810l/

大空の二人、変えられない運命

2010年10月9日02時20分発行